旧市原郡東海村の今と昔

（廿五里堰）

令和３年６月

鎗　田　功

旧市原郡東海村の今と昔

はじめに

市原郡東海村は、明治２２年３月３１日の町村制施行による町村合併が行われ、廿五里、野毛、町田、海保、島野、飯沼の６村が合併して誕生した。

東海村は、市原郡の北部、遠浅の東京湾から１～２ｋｍ内陸の養老川左岸に位置しており、海保地区以外は水田・畑・果樹栽培などが多く農業が主たる産業であった。海保地区は南部では山林が多くなっており、里山として管理がなされていた。山林の樹木を利用した炭焼きも昭和３０年ごろまで行われていた。

東海地区に隣接する五井・千種・姉崎地区は遠浅の海を利用した漁業が盛んであったが、昭和３０年頃に実施された海面埋め立て事業により、大規模な石油コンビナートが出現し、地域の状況は大きく変貌した。東海地区は海面埋め立てに伴う変化はなかったものの、工場の稼働に伴う大気汚染等が発生するなど間接的な影響はあった。現在も東海小学校の校庭には大気汚染の自動測定局が設置されている。

近年は、廿五里、町田、海保地区では、農地は休耕地が多くなり、海保地区の山林も人が踏み込めないほど荒れてしまっている。また、海保の一部地域はソーラーパネルの設置や物流団地としての開発が進んでいる。さらに、島野や飯沼地区は、五井駅に近い地区で住宅開発が進んでいる。

市原市において市街化の進んだ五井・姉崎地区の後背地として住宅開発が進んでいる島野・飯沼地区と過疎化が懸念される廿五里・町田・海保地区等旧東海村の今と昔について市原市中央図書館の資料や現地踏査等によって調べ、東海村全体の状況と地区ごとの状況をまとめた。

１　東海村の今と昔

市原市の地域に人々が住み始めたのは何時頃からであろうか。市内では縄文式文化に先行する石器類が散発的に発見されていることから、１万年以前より人類の生活舞台であったようだ。温暖な気候と海・山の幸に恵まれた市原の地は、原始生活にも快適な地であったとみえ、縄文・弥生時代を通じて遺跡が頗る多い。海保地区の諸久蔵貝塚は、縄文時代中期の遺跡といわれている（稿本市原市歴史年表　昭和５０年３月市原市教育委員会）。

大正５年に市原郡教育委員会が編纂した『市原郡誌』によると、東海村の地勢について次のように記述している。

『本村は、地形南北に狭長にして、南部一帯は丘陵起伏す。姉崎立野新畑より北方に連亙する丘脈は進んで本村諸久蔵に入り６９ｍ突余の高地をなし庚申台に至りて二脈に分かれ、一は直に北進して岩戸に延び海保に至りて尽く、一は西北進して尾澤に亙り姉崎町境を北に延びて蜿蜒（わんえん）海保の西部大塚山（海抜５０ｍ突余）に終わる。海保より北部は約１里許は一帯田野にして、中谷・堀之内・伏木・下河原・廿五里・野毛・塚原・金川原・島野・飯沼に亙りて低平なる耕野遠く相連なり、地味すこぶる肥沃にして禾穀の植栽に適せり。』

明治２２年の市制及び町村制の施行に伴い、廿五里、野毛、町田、海保、島野、飯沼の６村を合併して東海村が誕生した。その後、昭和２８年制定の町村合併促進法に基づき、２９年１１月五井町と合併した。また、昭和３８年に市原、五井、姉崎、市津、三和の５町が合併し市原市が誕生した。さらに、昭和４２年には南総町、加茂村が合併し、旧市原郡が市原市となった。

『市原のあゆみ』によると、明治２２年の町村制施行時の町村合併は、郡長が立案し、関係町村の合意によって県知事に上申するという順序であったが、必ずしも順調に事が運んだとは言えなかったようだ。東海村ははじめ六郷村(六つの村が一つの村にになったという意)が選ばれたが、東海村に決定した。海上郡の東部に位置するためでしょうか。

旧市原郡東海村は、昭和の町村合併で五井町となり、さらに市原市となっている。

東海地区には現在市立小学校１校、県立高等学校１校があるが昔小学校と同じ敷地にあった中学校は旧海上村の今富に移設されている。その他の公的施設としては、町会ごとに設置されている自治会館、駐在所(１)、郵便局(１)があるのみである。また、昭和４０年代初めには海保地区に市営霊園(現在の火葬場は今富地籍)が設置されている。さらに、令和２年には海保地区の山林を開発し、物流団地が設置された。

今回この資料をまとめるにあたって東海地区を歩いて視たところでは、地区内にスーパーマーケット、ドラッグストアー、コンビニエンスストアーは１軒も確認出来なかった。これは幹線道路の位置との関係もあると思われる。また、車社会の進んだ現在、別にこれらの店の有無で地域を評価することはできないが、このことは地域の居住人口があまり多くないという状況を如実に表しているともいえよう。

東海地区は、昔から、海保、廿五里、野毛、飯沼、島野、町田の大字の６地域に区分され、『市原郡誌』でも各地域の特徴等がこの区分で記載されている。また、現状の市原市の人口統計等の地域区分もこの６地域単位で示されている。

一方、東海地区の町会は１４町会で構成されている。市原市の担当者は、町会・自治会は任意団体であることから必ずしも地域区分と一致しないとしている。

東海地区の地域区分と町会・自治会名を記載すると次のようになる。

廿五里：下川原、廿五里、廿五里新田
町田：町田
野毛：野毛
島野：金川原、七ツ町、塚原、ニュー島野、(谷島野)
飯沼：飯沼
海保：中郷、上郷、南和、中谷

なお、島野地区については、内房線から海側の地域はニュー島野町会を除いて谷島野町会として千種地区に所属している。

東海村の人口を次ページに示した。東海村誕生当時は、４６３戸(当時は世帯数でなく戸数)２４３０人であったものが、昭和６０年には１８７８世帯６４０８人、令和３年には３２６４世帯７００４人となっている。昔は子供が多かったことから世帯数に比して人口が

多い。また、東海地区内でも地域による人口の増減が顕著で、島野、飯沼地区は人口が増加しているが、他の地区はあまり変化ないかむしろ減少している地区もある。

東海村の人口等の推移

	明治２２年			昭和６０年		令和３年	
住所	面積	人口	戸数	人口	世帯数	人口	世帯数
廿五里	１１３町６反６畝	４０５	８３	９１０	２４２	６０２	２６２
野毛	４１町２反９畝	１５４	３０	３７４	１０９	２９４	１１８
町田	４５町８反７畝	２１１	３５	２１３	５３	１５２	６２
海保	３９１町１反５畝	８１１	１４９	１０９７	２９３	７７２	３４２
島野	１４４町４反７畝	６１５	１１７	２１５５	６３１	３１６０	１５２４
飯沼	５５町７反２畝	２３４	４９	１６５９	５５０	２０２４	９５６
合計	７９２町１反６畝	２４３０	４６３	６４０８	１８７８	７００４	３２６４

＊明治２２年の人口、戸数につては『市原のあゆみ』、面積については『市原郡誌』幅員を引用。

昭和６０年については千葉県統計資料、令和３年については市原市統計資料。

２　集落別の状況

（１）廿五里

『市原郡誌』によると、昔は「露乾地」、「津以比地」の文字が混用されていたとしている。また、宇佐八幡神社明細帳に鎌倉公の崇敬篤く毎年幣帛を奉るための使者を遣わした。鎌倉から二十五里であることから名付けられたという。さらに、頼朝公との関係により村名が起こったとしている。

また、田中喜作（市原地方史研究１８（平成６年３月））は、面白い説を記している。『比地を肘（ヒジ）に当て、考え事をするとき肘を曲げて頬杖を突く、つまり「ツキヒジ」である。そして肘をゴリゴリさせることがある。だから五里×五里で廿五里になる。ゆえにツキヒジ（築比地）を廿五里という文字を当てたというわけである。この説はばかばかしいが、案外まとを得ているかもしれない。地名の中には語呂合わせが意外にある。』

廿五里には、廿五里、廿五里新田、下川原、伏木があり、これらの集落は廿五里、廿五里新田、下川原の３自治会を構成している。このうち、廿五里新田町会は養老川の右岸に位置しており、この地区の児童生徒は、国府小学校及び五井中学校へ通学している。

廿五里は東海地区の中心部に位置しており、村役場や小学校、中学校が設置されていたが、中学校は現在海上地区に移設されている。

（昭和２９年に再建された二宮金次郎像と東海小校舎）

① 東海小学校

学校のホームページに記載されている沿革によると、明治年代に地区ごとに創設され、大正１４年に現在地に校舎が建設されたとしている。

昭和３７年には併設されていた中学校が海上地区に移設された。

明治６年 廿五里小学校（東泉寺）、飯沼小学校（龍昌寺）、島野小学校（三光院）創設。明治７年海保小学校（森巖寺）創設。大正１４年 両校を統合し、東海村立東海尋常小学校と称し、現在地に新校舎を建設する。昭和２２年 東海村立東海小学校となる。昭和３７年７月１日同敷地内にあった東海中学校の移転に伴い独立する。筆者が在学していた頃（昭和２５～３１年）には校歌は無かったが、現在の校歌は右欄に示すもので、地域の様子を謳いこんだ素晴らしい歌詞であると思う。しかし、二番に謳われている「科戸の神」についてはなかなか難しい言葉である。

「科戸の風」とは風の神シナツヒコ・シナトベ神が起こす神風のことである。「志那都比古尊」は島穴神社の祭神である。シナツヒコは、日本神話に登場する神である。 『古事記』では志那都比古神（しなつひこのかみ)、『日本書紀』では級長津彦命（しなつひこのみこと）と表記され、神社の祭神としては志那都彦神などとも書かれる（ウイキペディア)。

「もしも叢雲(むらくも)　明(か)を奪ひ、道に障(さわ)りの有らん時しなとべの神現れば道の明(か)奪う　八重雲を科戸の風に押し払い夜(よ)も明け方と知らすべし」

このことからシナツヒコ・シナトベ神は分厚い雲が太陽を隠して道に迷うほど暗くなった時に科戸の風で雲を押し払って太陽の光を呼び込む働きをされることが分かる。

東海小学校校歌
伊藤公平　作詞
寺内　昭　作曲

一　養老の川流れ
みどりに燃ゆる郷土
清らかにめぐみあり
ここに立つ学びの園生
はげめよ わが友
東海小学校

二　科戸の神います
島穴の森も近し
手をとりて日毎通う
梨の花 桃の畠
つとめよ わが友
東海小学校

三　仰げ空 今ぞ
海保の丘に朝日
さわやかにさしいでたり
西の方 富士は白く
はえあれ わが校
東海小学校

旧東海村内の児童生徒の通学する学校については、多くの町会は東海小学校、東海中学校であるが、一部の町会は他の学校へ通学している。

東海小学校・東海中学校：中郷、上郷、南和、中谷、町田、下川原、廿五里、野毛、塚原、金川原、七ツ町町会
東海小学校・五井中学校：飯沼町会
国府小学校・五井中学校：廿五里新田町会
千種小学校・千種中学校：ニュー島野町会

② 廿五里堰

古来より川の水は田畑の灌漑に利用されていた。河川の水を利用するために必要な技術として堰の構築がある。養老川には明治期に、吹上堰（大正初期の灌漑面積１７９ｈａ)、出津堰（同７４ｈａ)、中瀬堰（同６２ｈａ)、飯沼堰（同１２３ｈａ)、廿五里堰（同３０３ｈａ)、西広堰（(２６９ｈａ）の６堰が存在していた。

廿五里板羽目堰は、現在コンクリ―ト製の堰として灌漑期には東海、千種地区の農業

（堰湛水時の廿五里堰上流と下流の状況　2021.3.30）

用水として利用されている。私が小学生の頃の廿五里堰は板羽目堰であったと思われ、堰の下流部には、現在では貴重となったウナギの稚魚（シラスウナギ）が川底が見えなくなるほど密集していた。

廿五里にある『東海千種土地改良事務所新築懸念碑』には次のように記載されている。

本地域は灌漑用水を養老川に仰ぎ、廿五里堰より取水してきたが、本堰は当初羽目板式の木造可動堰であったが老朽化と同時に洪水になると堰を取り外す作業の復旧は多額の費用、労力を要し、人命にも危険を及ぼし、多年にわたり苦慮してきた為、地元民の間に堰の根本的改修の声が高まり、昭和２５年東海千種連合耕地組合（現在東海千種土地改良区）が事業促進に努め、昭和３０年に工事着手し、３６年に工事完了し現在に至る（平成１８年３月１２日）。

なお、西広板羽目堰は、市原市有形民俗文化財に指定され、現在も数年に一度組立公開が行われている。

『市原郡誌』は廿五里板羽目堰について、次のように記載している。

『市原郡の西北部にあり、廿五里村において養老川の流を堰き、その水を引て川西八村（町田村、廿五里村、野毛村、島野村、柏原村、白塚村、青柳村、今津朝山村）の水田二百六十八町歩餘に灌漑す。水路数条あり、長きものは一里十五町に達す。その利甚だ饒かなり。はじめ土砂を以てこれを堰く、動もすれば破壊して水を引く能わず。明治１６年５月八村の民相謀り、木板をもってこれを堰ぐ、以来破壊せず。ここ川幅５８間、その１６、間は即ち木板をもってこれを堰き時に臨み、土砂を以てこれを堰ぐ、因りて名付けて板羽目堰という。』

③ 社寺

◎　宇佐八幡神社：『市原郡誌』によると、廿五里八幡台にあり誉田別尊を祀る村社なり、鎮座年紀詳ならずと云えども言い伝えでは、貞観年中勸請する處なり。としている。

（移設された宇佐八幡神社）

現在の宇佐八幡神社は、東関東自動車道の建設により現在地に移設されたもので、神社の石碑にその経緯等が記されており、その抜粋は次のとおりである。

『当社は貞観年中（８５９～）に大分県鎮座の宇佐神宮の御分霊誉田別尊命を勸請したのが初めてであり、

下って治承４年（１１８０）源頼朝公、伊豆で挙兵、阿波、上総を経て上総に進出、当地通過の時守護神たる当社を詣で武運長久を祈願、のち鎌倉幕府興してからも頼朝公は当社に使者を遣わして幣帛を奉り感謝の誠を奉げた。当時この地は鎌倉隔たること廿五里を以て村名とされたと伝えられる。以来１１００年後の今日、東関東自動車道千葉木更津線新設が計画され、その道路が境内を貫通するものであった。氏子一同公共のため鎮座地を移し、社殿新築、境内全域整備・・・・・』　平成６年１１月２０日

◎　若宮八幡神社：『市原郡誌』によると、廿五里字宮ノ下にありて大鷦鷯命を祀る村社なり、貞観年中（８５９～）勧請する。境内官有地二百十六坪を有し老松林立するも亦宇佐八幡に比すべくもない。

　社殿は明治維新前より鎮座され、境内には樹齢１００年以上の古木が数本ある。（「千葉県神社誌」より）

◎　東泉寺：下川原地区のあり、真言宗豊山派の寺院である。明治６年に東海小学校が設置されている。

　寺に掲げられている沿革によると、高倉天皇（１１７０年頃）の創立にして、殊に源頼朝公の信仰篤く、鎌倉より月賽の使として東泉寺に遣わす。当時鎌倉より距こと廿五里。故に当地名廿五里と云えり・・・・。

◎　恵光院：廿五里地区にあり、創建年代は不詳。真言宗豊山派の寺院。

（２）町田

　『市原郡誌』によると、江戸時代の中頃養老川は柳原より町田の中央を貫通していたという。地域は低平にして町田の最も低き部分は水害をこうむること頻々たり、土質は一般に川より来る沖積的土質にして肥沃なり。

　本村中央に水田を挟み南北相對す、以て自然に地勢南北両分す、北方の一部を河原、西南の一部を中島或いは川瀬という、南北西部の間にある水田を古河という。元来地面低平なるにより洪水を被る屢々にして人家の移転も同じく漂流なし、今日は東岸に移住し明日は西常に転居し、移転の最も多きものは一世三四回に及ぶものありしと云う。

　『千葉県県土整備部資料』によると、町田を流れる前川水系は、市原市引田地先にその源を発し、二級河川養老川、準用河川今津川と流域を分けながらほぼ併走し、千種海岸地先で東京湾に注ぎ、流域 6.1 ㎢、河川延長 5.1 ㎞の河川である。東関東自動車道下流部については、河川改修が終了しているが、上流部は未回収で洪水等発生が予測されることから、千葉県において改修計画が進められている。

①　社寺

◎　町田熊野神社：熊野三社を勧清して、天正７年（1579）創建されたという。明治維新後の社格制定に際し村社に列格大正３年地内の八坂神社を合祀している。

◎　不動院：『市原郡誌』には海保遍照院の末寺と記載がある。町田不動院の縁起によれば、この村の名主新藤勇右衛門

の祖先が町田に土着した時、祖先より伝えられた不動明王像を持ってきたが、像に向かって「農民に落ちぶれたのは不動様の功徳が無いからだろう」と愚痴をこぼしたら、その夜、家鳴とともに不動様が光り輝き東に飛び去りました。それに驚き自分の日を詫びましたところ、屋敷の東にある榎の枝にとまりましたので、そこにお堂を立てて安置したのが不動院の始まりということです。

（３）野毛

野毛地区は、旧東海村の中心部に位置し、廿五里、飯沼、島野地区と隣接している。明治２２年当時は旧東海村を構成する６村の中では、面積も人口も旧東海村内で最も小さかったが、令和３年現在は地区内を県道が通っていることもあり町田地区より多くなっている。

田中喜作は『市原の地名』で、野毛の語源について、『ヌケ（抜）の転で、「崩壊地形、浸食地形」をいうか。当地は養老川の下流域で、太古より川の反乱を受けやすい地形であった。』としている。

①　社寺

◎　白幡神社：境内に地域の児童が植栽したと思われる植物の苗が児童の名札付きで多く植えられている。

◎　法泉寺：顕本法華宗の寺院。境内の墓地に飯島吐月の墓がある。飯島吐月は江戸時代の俳人で、大島蓼太の高弟。墓碑に次の句がある「残すべき葉もなき秋の蝉のから」。

（４）島野

『市原郡誌』によると、本村は人皇十二代景行天皇東征以前の創置にして當時島穴と稱せり、成務天皇の朝本村に海上の国造を定置せられ又和名抄に海上郡島穴懸馬野村島穴の郷と見え、兵部式に島穴驛と出づ、後（年紀未詳）海上郡は市原郡に隷属し郷名も亦島野となる、蓋し野は穴の通音より轉じたるなるべし、或いは云う島穴・馬野の二村を併せ中間二字を略したるなりと。

島野地区には現在、谷島野、ニュー島野、金川原、七ツ町、塚原の５町会があるが、そのうち島野地区人口の６０～７０％を占めていると思われる内房線北側の谷島野町会は千種地区に所属している。

島野地区は、比較的人口増加が少ない東海地区において市街地の五井に近いこともあり、地区内人口が多くなっている。

① 京葉高校

京葉高校は、昭和４０年に設立された県立高校としては比較的新し高校で、筆者が東海

中に在学していた頃はまだ設立されていなかった。高校設置前は県の農業試験場用地（？）で小学校当時果樹園（葡萄？）の草取りに行ったような記憶がある。

『京葉高校ＨＰ』に高校の設立状況につて、次の記述がある。

本校は１９５２年（昭和２７年）４月、千葉県立市原第一高等学校八幡分校として始まり、１９６５年（昭和４０年）４月、現在の千葉県立京葉高等学校として設立され、同年４月２８日に創立記念式典を挙行しました。１９７４年の創立１０周年記念誌には、創立当時の様子を伝える以下の文章があります。

独立前年現地にプレハブの仮校舎が建設され、４月に八幡校舎から移転を完了。１０月には１万３千余坪の校地に本建設の基礎工事のパイルが槌音高く打ちこまれたのであります。翌４０年４月１日、鉄筋３階建の校舎第１棟の半分と第２棟が建設された時点で、千葉県立京葉高等学校としての独立第一歩が踏み出され、普通高校としては，まれに見る広大な敷地(49,215 平方メートル)の中に，３階建ての校舎が３棟と，体育館，第２体育館，武道場，セミナーハウス，部室が建ち並んでいます。グラウンドも，野球場，陸上競技場，　サッカー場，テニスコートのほかに，ソフトボール場，弓道場，アーチェリー場，ハンドボール場(多目的グラウンド)などがあります。

② 千年村

千年以上にわたり災害や社会の変化を乗り越えて生産と生活が持続的に営まれた集落・地域を指す。千年村プロジェクトは「早稲田大学創造理工学部 建築学科・中谷礼仁研究室」などが中心となり、平安期の文献『和名類聚抄』をもとに候補地をあげている。

（島野地区航空写真と各地区の位置関係）

このプロジェクトにおいて、島野地区は古代において社会的集団が存在したとしている。島野地区は平坦地が多く農業に適した土地利用であるとされ、千年村を起源とする町字のなかでも相対的に生産性の高い地域だといえるとしている。島野地区の中でも七ツ町・金川原地区において微地形に応じた伝統的な土地利用が災害リスクを減じていることを指摘し、結論として島野地区の持続性、その要因としての防災性を評価している。

③ 古養老川

市原市を縦貫する養老川の下流は、古代（７～８世紀頃）は現在の島野地区を蛇行し、青柳付近で東京湾に注いでいたという（市原市文化在研究会　前之園亮一)。つまり古代の嶋穴郷は、古養老川下流部の右岸に位置していた。

千年村と云われる七ツ町と金川原との間を古養老川が流れており、両地区は比較的低地にもかかわらず水害等の自然災害の被害もなく肥沃な農地に恵まれた農村として持続的に発展してきた。

現在養老川は五井地先で東京湾に流入しているが、当時は現在の前川河口で東京湾に流入しており、流入地先周辺は海上潟と呼ばれ、天然の良港であった。（右図　古養老川）

④　社寺

◎　島穴神社：『島穴神社略記』によると、祭神は志那都比古尊、日本武尊、倭比売尊。「延喜式」所載の上総五社のうちの一社であり、明治１２年には千葉県の県社に列格し、格式ある名社として古来多くの人から崇められている。

本殿正面に掲げられている扁額は、文政６年（１８２３）に老中松平定信奉納したものという。定信は、房総巡検のため、たびたび市原を通過したが、その際、島穴神社に海防と幕府安泰を祈願、参拝のため立ち寄ったと伝えられている。

◎　古川神社：祭神は月夜見命（ツクヨミノミコト）天照大神の弟、須佐之男命の兄でありながら。古事記や日本書紀にもあまり出てこない知る人ぞ知る神様。そのため月夜見命が祀られている神社は全国的にも珍しいという。

『古事記』では、黄泉国から戻られた伊邪那岐尊が右目を洗った際に生まれ、『夜の食す国（夜が支配する国）を治めよと命じられている。』『日本書紀』では、月の神として生まれたとされており『その輝きは日につく美しさなので、日と並んで統治すべしと天に送られた』と記されている。

◎　宝前院：七ツ町にある真言宗豊山派の寺院。

島穴神社に扁額を奉納した松平定信は、神仏習合の時代に設置されていた島穴寺についても同様に扁額を奉納したといわれており、神仏分離により廃寺となったため扁額は近くの宝前院に移されたということを地域の方から聞いたことがある。

◎　善龍寺：金川原にある顕本法華宗の寺院。『市原郡誌』によると、『沿革不詳なれど僅かに鐘に刻せらるるものによりて見るに寛政頃には帰依する者多かりしを知る。宝物として、本尊三體・梵鐘・半鐘・打迷各一箇、經文八巻を有す。』とある。

（５）飯沼

『市原郡誌』には次のように記載されている。『人皇四十五代聖務天皇以前の創置にして父老の言によれば和名抄などに稲庭今入沼村ありと見えて即ち飯沼と云えるはもと入沼にして何時より唱えしかは詳ならずという。』

古代は「稲庭」、中世には「入沼」と呼ばれていたのが現在の「飯沼」とされています。当地名は「イイヌマ」という呼称が一般化しているが、地元の人は「イルマ」とも言っている。応永年間（１３９４～１４２８）とされる『馬野郡惣勘文』（円覚寺文書）には「入沼」と見える。近世の村方文書でも「入沼村」とあり、本来は「入沼（イルマ）だったのであろう。これはすなはち、海が入りこんだ地形（後年陸地化）からきている地名に他ならない。（田中喜作：市原の地名　市原地方史研究　No.18）

なお、地元の方言では「飯沼」を縮めて「いるま」と発音されている。

①　社寺

◎　春日神社：社伝によると、永和年間（１３７５年頃）大和国春日大社から勧請したとある。経津主命は香取、建御雷之男命は鹿島の神であり、日本建国の大功神といわれる。天児屋根命、比売命はもともと大阪の枚岡神社の祭神で、奈良に都が遷され春日大社が創立された時前社の神々と共に祭られた。春日さまは藤原氏の氏神であったが、のち皇室、国家の守り神とされ、庶民の信仰も極めて篤かった。心身健全・開運の守護神として全国的に厚く崇敬されている。「千葉県神社名鑑」

◎　弁財天：養老川の中瀬橋下流左岸河川敷内にある。河川堤防から入った所にある小さな社の中には蛇の置物がある。

弁財天はもともとヒンドウ教の女神で、水に関する神様とされている。川の恵みから豊穣の神様として信仰されている。そのため、川のイメージにより龍や蛇が弁財天のお使いとされるようになった。各地にある弁天社には狛犬ならぬ狛蛇がお社や祠の前に置かれている場合がある。蛇の中でも白蛇は金運アップの御利益が高いといわれている。

◎　日枝神社：大山咋命、京葉高校に隣接

◎子神社：大巳貴命、養老川霞橋に隣接

◎　龍昌寺：本殿と併せて太子堂が建立されている。『市原郡誌』に太子堂の謂れ等詳細に記されている。また、太子堂正面にその由来について記された額が掲らている。

『龍昌寺の聖徳太子像は大阪市天王寺大和の法隆寺とともに上宮大使（聖徳太子）の自作の木造で「日本三太子」と云われる。縁起によれば天仁元年（１１０８年）の鳥羽天皇の頃入沼在住の龍昌禅の夢枕に「春日明神」があらわれ川向の水底に聖徳太子十六才時の尊像が埋もれているのでこれを引き上げて多くの人に拝ませよ。進行すれば村里は繁栄するであろう。』のお告げがあり次の御詠歌を示された　『・・・・・・・・・・・・・』

村人川底から生けるがごとき太子像を掘り起こし豫てより信仰の薬師如来と共に安置し薬王山龍昌寺と號し、天下安寧萬民豊穣を祈り霊験灼かに御利益を受ける者数知れず

明暦の頃江戸小田原町大和屋勘兵衛なる信者が失明した両眼の治癒を祈願した處願いの叶って開眼し、近郷近在目や耳の平癒を願って参詣するもの後を断たず快癒の御禮に錐を奉納する習わしある。』

（龍昌寺本堂）

（太子堂正面）

（６）海保

『市原郡誌』海保の項の記載から筆者なりに解釈すると、昔は養老川を境として川より西南の地域が海上郡と云われ、海上郡は中世に分かれ、海南・海北の２郡となった。海北郡は養老川以西馬立、以北今富・今津・姉崎と総称したが、海北郡がなまって海保となった。また、次の主旨の記載もある。市原郡上高根村・大坪村等の寛文（皇紀２３２１～２３３１年）元文（皇紀２３９６～２４００年）年中の水帳には海保荘の文面があり、海上郡に海上保を置く、後上字を省いて海保と称す。今の海保はその跡なり。

また、海保について公家の臺・御腹臺さらには付近の地形を考慮すると、この地方のみならず上総の国の重要な地であったと思われるとしている。

皇紀：日本書紀に記された神武天皇即位の年を元年とする紀元。皇紀元年は西暦紀元前６６０年にあたる。　令和３年は皇紀２６８１年　西暦２０２１年。

海保地区の昔については、筆者が『海保地区の昔（令和２年１０月)』として既に地域の状況についてまとめていることから、ここではそこに記述しなかった地域等につて記載することとする。

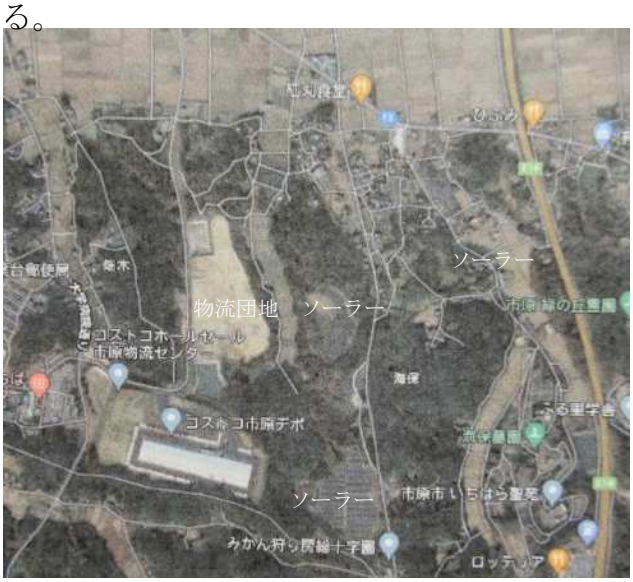
海保地区には中郷・上郷・南和・中谷の４町会があり、このうち『海保の昔』に記載していない南和・中谷についてここで記載することとする。

①　南和町会

この地区は海保の南部に位置し、里山が広がる台地で、昔は手入れの行き届いた里山であった。この地区には庚申台、諸久蔵など古代の遺跡も多く確認されている。しかし、現

在この地区は東海地区で最も開発が盛んな地域である。

◎ ソーラー発電所の設置



中郷地区から市原市立野へ向かう道路の右側に大規模なソーラーパネルが設置されている。当地は平成１０年代には山あいの谷地でゴルフ練習場用地との看板が掲げられたことがあったがその後谷部が大量の残土で埋め立てられ平地として造成され、そこに大規模なソーラー発電所が設置され、現在に至っている。

また、上郷地区の森巌寺近くの水田であった土地にもソーラーパネルが設置されている。

◎　物流団地の造成

大塚山から南方向は、昭和３０年頃までは手入れの行き届いた里山と茅葺き屋根用の茅山であったが、近年は荒れた山林となっていた。

このような地域において大規模な開発計画が進められ、埋蔵文化財の調査も実施されていた。開発面積は約５０ヘクタールで、既に全区画売却済みとなっており急ピッチで建設が進められている。すでに、操業が開始されている事業所もある。

計画地では、台地を掘削しその土で谷部を埋め立てて造成されており、下流の農業用水の溜池には計画地内の雨水調整等から流出する水が流入しており、降雨後の農業用ため池には粒子の細かい粘土を含む泥水が溜まっている。

◎　庚申堂：地区の中心部に設置されている社。鳥居も設置されて無く、あまり大きくはないが、正面の扉を開くと中に八坂神社と記した石碑を中心に、左側には庚申塔（青面金剛酷像塔）が、右側には穏やかな地蔵様（？）の様な石像が並んでいる。この地区は字名を庚申台と云い、地域の人は親しみを込めて「庚申様」と呼んでいる。

②　中谷地区

中谷町会は、海保地区北部に位置しており、他の町会とは耕地整理の進んだ広い水田で分離している。中谷地区の北部も水田が広がっており、県道に沿って細長い島状に分布している。この地区は昭和の時代からあまり変化がない。

（左写真は中郷地区から見た中谷地区）

◎　熊野神社：中谷地区の中心部に設置されている。

◎　八坂神社：中谷地区南部県道沿いの水田の中に設置されている。

◎　大入神社：切生地区の水田の中に設置されている。

熊野神社（中谷）

八坂神社（中谷）

大入神社（切生）

あとがき

昨年（令和２年）１０月に筆者が小学校２年まで住んでいた海保地区について『海保の昔』として、図書館の文献を参考にするとともに、現状について現地踏査した結果を資料としてまとめた。

その後、筆者が通学した小学校・中学校のある旧市原郡東海村全域について調べてみることとし、文献や現地踏査により地域の昔と現在の状況についてまとためた。

あまり広くない東海地区でも昭和・平成・令和と時代が変わっていく中で、外から見た様子が大きく変化している地域と、あまり変化のない地域があることが現地を歩いて視て実感した。

本資料は、筆者が感じたことをそのままままとめたものであり、調査が不十分な点や間違っているところもあると思う。本資料の内容について修正や追加すべきことなどご指摘いただけると幸いです。

参考文献

１　市原郡教育委員会編纂：市原郡誌（大正５年）

２　市原郡教育委員会：稿本市原市歴史年表（昭和５０年３月）

３　市原郡教育委員会：市原のあゆみ（昭和 48 年 3 月 30 日）

４　市原市立東海小学校新校舎落成創立百年事業実行委員会：記念誌「創立百年」（昭和５２年１１月５日）

５　京葉高校ホームページ　https://cms2.chiba-c.ed.jp/keiyo-h/home-1/

６　青柳至彦：いちはら歴史の散歩道　市原市農業協同組合（平成２４年１０月）

７　田中喜作：市原の地名　市原地方史研究　№.18　（平成６年３月）

８　矢島一馬：上総嶋穴駅についての一考察　古代上総国の嶋穴駅と官道　市原市文化財研究紀要№.1（平成 6 年 11 月）

９　前之園亮一：上海上と下海上　市原市地方史研究　№.17（平成４年３月）

10　島穴神社宮司：島穴神社略記

11　千葉県教育委員会：千葉県の産業・交通遺跡(養老川西広板羽目堰)(１９９８．１２)
12　大成建設(株)市原市教育委員会：市原市海保地区遺跡群Ⅱ　海保広作遺跡　市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第３２集(２０１５)
13　千年村プロジェクト　https://mille-vill.peatix.com
14　鎗田功　市原市海保地区の昔（令和２年１０月）